

「椿」という字は、中国では“チュン”と発音します。日本では“ツバキ”と読みます。

それは何故かという、春真っ先に咲く花だからです。木に咲く花としては梅に先駆けて咲きますから、春の木と書いて「ツバキ」を意味しますが、中国では違います。

日本語に合うように使うから、中国における意味と日本での意味と違うものが出てきます。

木の名前とか魚の名前は、まったく中国とは別のものであることが少なくありません。“さがなへん”の字は、だいたい日本でつくられたと考えたほうがよいようです。中国で使われている字を使っても、意味が違うことが多いのです。

たとえば「鮎(アユ)」は、中国では「鯰(ナマズ)」を表す字として使われているのです。全然意味が違います。したがって、同じ字であっても中身はまったく違うこともよくあるので、自分たちの使い方で判断すると、とんでもないことになります。

漢字は90パーセント以上がこの形声でつくられています。したがって、漢字の左のほうを見ると意味がわかる、右のほうを見ると発音がわ

かるというような仕組みになっています。もちろんこの逆もあります。

上下に分かれる時には、上を“かんむり”、下のほうを“あし”といいますが、この場合、上はだいたい意味を表し、下のほうは発音を表すというように考えたら間違いありません。例外もありますが、大部分はそうです。

ですから、知らない字を見てもわかるわけです。これが日本人の頭がよくなる理由です。漢字を使っているから、自然と頭を働かせているのです。

ポイント:どんな漢字でも、教える時には漢字を見せて話をしなくてはダメで、言葉で言うだけではいけません。たとえば「手を洗う」という話をするときには、黒板にちゃんとその字を書く必要があります。常用漢字にあらうとなかろうと、とにかく漢字で書けるものはすべて漢字で書くべきです。